

---

# 私の転移物語

ぱんだまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の転移物語

### 【Zコード】

N4823BA

### 【作者名】

ぱんだまる

### 【あらすじ】

異世界に転移してしまった5人の高校生のお話。転移5日前から繰り広げる、淡い青春の物語。

「世界を愛し、隣人を愛し、一人の少年を愛する、元気いっぱいの少女。」

「才能をもてあまし若くして生きる意味を見失っている孤高の天才。」

「運から見放され、この世の地獄を味わいながら、たった一つの絆にすがる少女。」

「がむしゃりに生き、情に篤く、己が道を歩み続ける不器用な少年。」

「高望みせず、平凡にして平和な日常をこよなく愛する少女。」

彼らの思いは異世界の果てまで複雑に絡み合つ。

気怠い体を引きずつてゆづくじとベッドから降りる。ここ数日、ろくに睡眠をとっていない。昨日も遅くまで養父の手伝いをしていた。

自分は他人より優れた力を持っている。

医師である養父を手伝いながら、あらゆる医学書を読み尽くすうちに新薬の開発や、新しい治療法の確立にすら携わるようになりました。この力で多くの命を救つたし、今後も多くの命を救つていこう。今までに多くの命を救つたという実感もある。目の前で重病の人間に開発した新薬を処方し快方に向かう姿を何度もみてきた。

毎日のよつに何百通もの感謝状が家には届いている。

俺は、確かに命を救える力をもつている。

それでも。

それでも、時々疑問に思うことがある。

俺が他人の命を救うためにじつして日々研究を続けるのは正しいことなのだろうか？

今、眼の前にある命を救つても、それが明日には失われるとすれば？ 救つた命はやがて尽き果てるその時までに、一体何を残すと言つただろう・・・。

俺がいつもの思想の迷路に入つていった時、玄関のチャイムが鳴つた。

時間だ。軽く身支度を整え玄関へと向かう。

「おはよっ、浩也。」

篠崎優香。同じ施設で育つた縁で、養子にもらわれてからはしばらく会うことはなかつたが、偶然にも今の高校で再会した。優香もこの近くの家の間に養子になつたのだそうだ。

そんな過去を思い出しつつ、今頃になつて眠気が少しでてきた。昨晩はほとんど寝ていらない気がする。

俺が氣だるそうにしているのに優香も氣づいたようだ。

「眠そうね・・・。

また、病院のお仕事しているの?」

「まあ、そんな所だ。」

朝日を受けて淡く光る緩い坂道は一人の歩みを静かなものにしていた。

「浩也、辛くない?」

ふと、紡がれる優香の声。  
誰に対する問い掛けなのか。

「・・・まだ、俺はましな方さ。

さあ、もつこぐれ。」

俺は彼女の手を引き、その心を癒すこともできず  
このゆるやかな坂を上りきついていた。

優香とは教室が違うので階段を登つた所でわかれ自分の教室に入る。

すると、こつものあの声が聞こえてくる。

「浩也、おはよー！」

「ああ。」

「もう、また”ああ”って、いつもいつも・・・。浩也、おはよには、”おはよ”だよ？」

九条麗奈はいつも周りに元気を振りまいているような奴だ。だが、俺はこの程度で元気になるほど単純な作りになつていないうだ。

「ああ、気をつける。」

「はあ、気をつけるつても・・・。

あ、おはよー律子！真一君！」

「おはよー麗奈ちゃん」

「おはよーさん。秋変わらずにさやかだな、九条は、一体何の話をしたんだ？」

麻生真一と栗原律子が九条の元気をひきられてやつてきた。この一人は九条と仲が良いようだ。

「浩也がね、挨拶もちゃんとできない悪い子だね、つて話。」

「あ～霧島だつて挨拶べりこりやんとするだら～。」

「それができないから、私がこ～んな賑やかになつてゐるんじゃない。」

「浩也、おはよひわん。」

「ああ、おはよひ。」

「ひよ、ひよ、ひよ、ひよつヒー。」

「何で私は”ああ”で、真一類ひよ”ああ、おはよひ”なのー。」

「ああ？ひだつたか？」

「ナホだよ、私はこいつもこつも、”ああ”だけだつたよー。」

「セウか・・・まあ、氣をつかる。」

「はあ・・・もつ浩也は本道だ・・・・・」

何といふか、九条は突然、にぎやかになる。

俺には未だに九条の賑やかになる鍵が何なのか理解できない。

麻生にこのことを話したら、女つてのはそんなものだ、って言われた。

そんなものなのか・・・？

## 転移5日前 麻生真一

その日もこつもと何も変わることはなかつた。

「やうだよ、私にはいつもいつも、”ああ”だけだつたよ?」

「やうか・・・まあ、氣をつかる。」

「はあ・・・もう浩也は本当に・・・・・・」

九条は相変わらず、浩也浩也つて元気にはしゃいでる。そんな元気を碎くのはいつもあるお嬢様。

「浩也、ちゅうといい?」

篠崎優香。色々と黒い噂も流れるが、儂さが魅力的ではある女子だ。

「ああ、わかつた。そうだな、外で話すか。」

たつた一言一言で、あの一人の間ではどうこう話なのが通じ合つて、で外で話そつとまでいくわけだ。

「ひ、浩也ーもうすぐ授業、始まっちゃうよー?」

「なら、欠席だ。麻生、適当に理由つけといてくれ。」

「はいはい、いつものことだしな。」

俺の返事を聞き終わらないうちに、元やつは

篠崎と一緒に教室の外にでていった。

「こんなのはこいつものことで、そんないつものことなのに毎度毎度、落ち込む奴が、この九条麗奈って奴で。

「なあ、九条。霧島は望み、薄いぜ？」

おまえが悪いって言つたじやなくて、篠崎相手じや……。」

「麻生君！ それ以上言つたら、怒るよっ。」

栗原が見かねて俺を止める。俺はビリツモこの余計な一言、といつのを直覺無にしてばかりなのだ。

「あ、すまん……。

悪かつた、少し無神経だつた。」

「いいよ、真一君が心配してくれてるの知つてるから。まあ、一限田は古文だよ～寝つけやだめだからね、真一君ー。」

「ー、古文か……。

さ、さすがに寝なことは即答しかねるな……。

ちなみに、古文は8割ほどの確率で寝ている。

「ふふつ、麻生君、古文苦手だもんねえ～。」

「駄目駄目駄目ーーーー！」

私の得意科目を寝るなんて、そんなこと許されないんだからー。

「おーおー、無茶苦茶な理論だなあ……。

なら、あいつの・・・。」「

「ん? なに?」

「いや、いい。さつ、気合を入れて、寝るかー。」

「真一君ーー」

あいつの方が・・・授業をふけたあいつの方がもつと許されない。そう、言つはずだつたけど、それは俺でも無神経だと思つ。だから、のどから溢れそつた、その言葉をあわてて飲み込んだ。九条には、やっぱ笑顔だよ。・・・そつ、思つ俺はただの阿呆なかもしれないな。

## 転移5日前 篠崎優香

私と浩也は、いつも大事な話をする時には  
校舎のはずれにある、樅の木の下で話をする。

教師や生徒が通ることが少なく、人気が少ないため  
何かと相談毎をするには向いているというのもある。  
もちろん、一番の理由はまた別にあるんだけど。

「優香、話してこつのはなんだ?」

「「「めん、またお金、貸して欲しいの・・・。」」」

浩也はお医者様の家に養子になつた、ところのもあるが  
彼自身、優れた才能を發揮して活躍しており  
学生ながら、かなりの蓄えがある。

情けない話だけれども、私はこつして浩也からの援助を受けている。

「また篠崎か?」

「「「めんなさい・・・。私のバイトだけじゃ間に合わなくてつて・・・。」」」

「そこまでして、篠崎に義理立てる必要はないだろ?」  
「いたん、縁を切つて施設に戻つた方が・・・。」

「そうした方がいいのはわかつてゐ・・・。  
でも、「めんなさい、それだけはしたくないの・・・。」

浩也と違つて、私の引き取り手は、散々だつた。

私を養子にした直後はそつでもなかつたのだけれど、色々あつて、今は養父も養母も手がつけられない。

最初に彼からお金を受け取つたのは、

毎日学校も休んでアルバイトばかりして過労で倒れた時だつた。

最初はその時だけのつもつが、今ではすっかり彼に頼るようになった。

おかげで私はこうして学校に通うことができるようになった。でも、皮肉なことに、それが私からあの家から離れる覚悟を奪つていく。

「まあ、おまえがいいならいいんだが・・・。

金は前と同じ口座に振り込んでおいてやるよ。」

「「めんなさい、浩也・・・。私、迷惑ばかりかけて・・・。」

「おまえがあつて、今の俺がいる。気にするな、これはお互いの問題だ。」

「ありがとう・・・。ありがとう、浩也・・・。」

彼がいないと成り立たない。そんな依存しきつた生活。駄目だとはわかつていても、依存という関係であつても、彼とのつながりが、うれしくて、愛おしくて。それが、ますます、私から覚悟を奪つていく。

「話はそれだけなら、俺はそろそろ戻るぞ。」

授業をさぼると、麗奈がつるさいからな。遅刻程度にしておきた

い。  
」

「ふふつ・・・やうね。本部吏僚めんなさい、浩也。」

「いいや。優香、おまえは戻らないのか?」

「もう少しここにいるわ。

私のクラスには噂の九条麗奈さんはいないし、ね。」

「ははっ、それもそうか。それなら安全だな。じゃあ、先に行くぞ。」

「

「ええ。九条さんによろしくね。」

依存しきつた私を、彼は疎ましく思つのではないか。  
その恐怖もある。

それでも、彼とこる」と、彼とのつながりを私は断ち切ることまで  
きない。

転移5日前 九条麗奈

「昼だ、昼休みだ！や、たあメシ食べよひがー。」

真一君の元気な声が聞こえてる。  
でもね、でもね。私はね。

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「あ、ああ・・・九条。古文を寝てしまつたのは謝る。  
で、でもだなあ、とりあえずそれは忘れよう！  
綺麗さつぱり忘れてメシを食べよう！腹が減つてはなんとやら。  
おまえの好きな古人の言葉だぞー。」

本当に、本当に、本当に・・・。

「な、なあ・・・？き、霧島、おまえもそつ思つよな？な？な？」

「ん、あ、ああ・・・。」

「ほ、ほら、霧島もそつだつて言ひしるぜ？」

本当につー。

「ん~な、言つてない！

いい、真一君ー古文を馬鹿にするつてー」とせ、

日本文学の根底を馬鹿にするつてことなのよー。」

「そ、そんな大袈裟な・・・。

だいたい、古文なんて覚えたつて使つところがないぜえ？」

「な、な、なに馬鹿いつてるのよ！」

古文を習わざして、どうやって日本の古典文学が読めるの！」

「徒然草も枕草子も源氏物語もみんな古文なんだから、古典文学全てを否定するつもり！」？」

「いや、俺そういうのに興味ないし・・・。

だいたい、どれもみんな翻訳されたのがあるつしょ？」

「わ、わ、わわっ・・・！」

真一君、洋画を借りても日本語の吹き替えを選ぶタイプでしょ？  
これだから、吹き替えにならされた人つて・・・。」

「なんで、そこで映画の話に飛ぶんだよ・・・？」

「うなつたら未だによだれの後がみえる、  
このだらしない真一君の性根を今日こよだき直さなきや！」

「いい？言語の一つ一つにはその言語にしかない、特別な意味が込められているの！」

言葉に翻訳はあっても、文学に翻訳はないのよ！――

文学を学ぶにはその文章が書かれた言語を知らないと、その本質を知ることなんてできないわけ！

真一君つてば、その所が全然わかつてない！」

「いや、だから俺、文学作品になんか全然興味ないんだつて・・・。

「

「あのね、真一君・・・・・」

「まあ、まあ、麗奈ちゃんもその辺で許してあげなさいよ～。

麻生君もさうひとつ疲れていただけなのよねえ？

別に日本文学を馬鹿にしあうとか、そういう気はないわけだし・・・

・。

「や、やうやう。やうやう感じで。」

私が怒り心頭の所で、律子の救いの手が入る。  
本当に、律子は真一君に甘いんだから・・・。

「ホントにホント？

真一君つてすぐ調子いいことばかり、ちょっと通用できないよ  
お・・・・。」

「ほらほら、麗奈ちゃん。

こつまでもぐじぐじ言わないのー早く飯こつましじょ。」

「はーい・・・・。」

「すまん、栗原、助かつた・・・・。」

真一君のだらしきにも困ったものだけど、今日の私は  
真一君にばかりかまつているわけにはいかないのですっ！  
なんとなんと、今日は麗奈ちゃんお手製のお弁当をつくりこまつ  
たのですー！

ふふふ・・・・古典的、だがしかし、浩也はまだこののがぐうとくへ

るはず！

「ね、ねえ、浩也・・・・・。浩也、今日は食堂で食べるの・・・・・？  
あ、あのね、私ね・・・・・昨日ね・・・・・。」

そんな私の勢いは、いつもあるの人。」

「浩也、お弁当つくりてきたの。一緒に食べましょ。」

「そうか、悪いな。じゃあ、俺は行くぞ九条。」

碎かる。

「あ、う、うん・・・・・そうだね・・・・・。」

「行きましょ、浩也。」

「ああ、今行く。」

わかってる、わかってるんだよ。  
いくら私がにぶいっていったって、篠崎さんが浩也のことをいづつ  
つているのか。

それぐらい、わかっているわよ・・・・・。

「いっちゃんたね、霧島君・・・・・。」

「う、うん・・・・・。」

わかつて・・・・・いるわよ・・・・・。

「あ、あのな、九条！俺も今日は食堂だつたんだけどな、たまには誰かの弁当とか食べたくなつたりするんだわ。」

「碎けた私の心を真一君がひろってくれる。  
がさつにみえるけど、優しい奴なんだ。わかってる・・・わかってる  
んだ。」

うん

・・・あ、そ、そうだ、私、昨日お弁当つくりすぎちゃつて！  
ひ、一人じゃ食べきれないから、し、真一君にも分けてあげるよ  
！」

「アリババセレクション」

篠崎優香・・・美人でかしこくて、物静かで・・・  
私は全然タイプが違う。  
それが、とても寂しかった。

一日の授業が終わって放課後。開放感と  
ちょっとした期待感溢れる時間の始まり。

「終わった――――――今日も俺は立派に耐え抜いたぞおー。」

「な、なに馬鹿なこと力いつぱい叫んでるの? ひとつでも恥ずかしい  
人だよ、真一君。」

真一君と麗奈ちゃんはすぐ仲良し。

私はそんな一人のやりとりを見てこるのがすぐ好き。

「は、恥ずかしい人つて・・・・おまえ、何でこの気持ちをわかつて  
くれないんだ?」

栗原、おまえならわかってくれるよな、この俺の熱い胸の内を・  
・。」

「へ? わ、私? あ、えつと・・・・ビ、ビつなんだろ? ・・・?」

「栗原、遠慮するな。ほら、ほら、ほら、おまえも叫んでみなさい。

」

「えつと・・・・えつと・・・・えつと・・・。」

たまに私も混ざつちやつたりして。すげーべドキドキするナビ  
でも、これも、とでも・・・・とでも好き。

「し、真一君! 律子に変なこと教えないでよー。」

律子は真一君と違つて恥ずかしい子じやないんだからねー。」

「いや、だから、その恥ずかしい子じやなんだよ・・・つたく。  
お、霧島、もう帰るのか?」

「ああ、まあな。麻生、おまえはまた部活か?」

「まつ、一応な。霧島~おまえも剣道部に入れよお~。  
おまえが入れば団体戦優勝も夢じやなのによお~。」

「時間ができたらな。当分は個人戦で我慢してね。」

「麻生君、剣道強いんだよねえ~。この前、県大会で優勝したもん  
ねえ~。」

「すつ~くかつこよかつた~!写メがす~くよく撮れてて、ホント最高!~

「まあ、私の次くらいには強いかもねえ~。」

麗奈ちりやんもすつ~く強いの。つらやましいなあ・・・。

「く~い、いつまでもおまえに敗けたままだと思つなよ、九条~。  
次こそは、必ずだなあ・・・。」

「お~、勝利宣言だね、真一君。なら、今日もコトンパにしてあげ  
よつかあ?」

「麻生、九条に勝てたら考えておいてやるよ。じゃあ、俺は帰るか  
ら勝利報告待つてゐるだ。」

「お、おこおい、霧島？」

霧島君は運動なんでもできるから、真一君は剣道部に勧誘しているみたい。

「こよいよ負けられなくなつたねえ～ 麻生君。」

「よろしご、不肖、九条麗奈、お相手いたします。」

北辰一刀流免許皆伝の腕前、思つ存分味わつてもひりふよ～。

「お、おこおい、俺はまだ今日やるとほ～一回もだなあ～。」

ちよつとたじたじな真一君。かわいい。

「がんばつてねえ～ 麻生君。」

「決まりだねえ～ あやうく～ん。」

「くつ、せ、せ、せつてやるかーおつ、せつてやるとほ～。」

「くじや、やつやく道場に行かへんかー。」

「おお～。」

「お、おう・・・。はあ・・・とほほだな・・・。」

ちなみに、私は剣道部の女子マネージャーさんなのです。

えつへん。というわけで、三人で剣道場に行きました。

麗奈ちゃんは小さい頃からやつてゐみたいで、すげく強い。

真一君は高校から剣道始めたけど、もう大会で優勝したりやつたり

の腕前。

すごいなあ・・・。

「せいやあ―――」

「がつ―」

鳴り響く竹刀の音と真一君の悲鳴。

「小手あり、一本一かな?」

「ふはつ―。これで本日も真一君の100人斬り達成だねえ―。」

「ふくえ―。お、おまえ相変わらず強すぎだぜえ・・・。  
ゼえーは、ゼえーは、ゼえーは・・・。」

100戦・・・はやつてないと思つんだけど、もうすいぶんと真一君は

麗奈ちゃんの特訓で鍛えられていた。

二人とも防具を脱いだら汗だくになつてこるのが目に見えてわかる。

「ふひい―ですがにちよつと疲れたねえ―。真一くんは少しばてす  
ぎだよお―。」

「そ、そんな」と・・・ゼえーは、い、いつたつて・・・ゼえーは、  
だな・・・ゼえーは。」

「はい、タオル。汗拭きなよ、麻生君。ビショビショだよお―?」

私は真一君にきれいに洗濯して、ちよつと香りをつけた

とつておきのタオルを真一君に手渡す。

「ゼーベーは・・・わ、悪い・・・。」

「はい、麗奈ちゃんも。」

麗奈ちゃんのは・・・まあそれは言わなのが大人の女つて奴なのです。

「ありがと、律子。」

「麗奈ちゃんはホントに強いねえ。憧れちゃうなあ。」

私も真一君から毎日挑まれるぐらい強い強ければなあ・・・。  
なんて思つてしまつ。

「えへへつ、律子に褒められちゃつたよ。

でも律子には律子の良いところがあるんだし

私も律子に憧れてるといつぱいあるからお互い様だね。」

「そ、そんなことないよおー。私なんか、全然ダメなんだからあ・・・。  
・。」

「人が怪我してると絶対にほつとけない優しい所。  
小さなことでも絶対に手を抜かない真面目な所。  
子供の世話とか好きで、面倒見の良いお姉さんな所。  
私、そういう律子に憧れてるよ。」

麗奈ちゃん、急に褒めるからびっくりしちゃう。  
真一君の前なのに、褒められてにやけちゃうよ。

「や、そ、そんなことないよ～、れ、麗奈ちゃん、おだてないでよお～。」

「いつも頼む前に手伝ってくれる、よく気が利く所。勉強を丁寧に教えてくれる、親切な所。手作り弁当がうまい料理上手な所。

栗原～おまえは男子の間でも評判いいぞお～。」

「ふはっ、もう駄目～真一君にまで褒められたらニヤニヤが止まらな  
いっ！」

「あ、麻生君まで、やだよお～。みんなして、私をおだてて、もう  
う～。」

「お～、真一君もたまには良い」というねえ～。  
でも、真一君の挙げた良いところって全部自分が得する」とばつ  
かだよねえ～。」

「ば、ばか、そんなことはないだらう～。」

「やだなあ～律子つていい子だから真一君にこよに利用されな  
いか、私心配だよお～。」

「なんだよ、それ・・・。何か、俺が非常に極悪人つて感じに聞こ  
えないか？」

「だつて、それが真実だからねえ～。律子、真一君には気をつけな  
いとダメだよお～。」

「 もう、麗奈ちゃん、あまり麻生君をいじめたらかわいそうだよ。」

「 よかつたね～、真一君、律子が優しい子でえ～。」

「 だから、俺はだなあ・・・。」

私と麗奈と真一君。みんな仲良し。でも、仲良しだからこそ、不安なこともある。

考えすぎちゃ駄目。

毎日楽しいじゃない。それ以上、望んだら・・・望んだら駄目。

## 転移4日前 九条麗奈

明るい日差し、轟る小鳥の声。いつもと変わらぬ朝の始まり。

一日の朝は善のエネルギーに満ちあふれている。

きっと全てがうまくいく、そんな気持ちになれる。

願わくば、今日一日、この気に包まれて過ごせますように・・・。

早朝の誰もいない学校の様子は、昼間のそれと同じ場所とは思えない程違う。

静まりかえった校舎はあたかも澄み切った湖のように

朝日と相まって神秘的に感じられる。

朝の空気は、いつもと違った何かを私に期待させる。

「はあ～、早起きすると、気持ちいいなあ・・・。」

澄み切った世界を思う存分堪能していると、不意に声をかけられる。

「あら・・・おはよ。」

「お、おはよひらいます。」

そこに現れたのは、私が知る限りでは

この神秘的な世界に最も似合う人、篠崎優香さん。

「九条麗奈さん・・・よね？」

私は隣のクラスの・・・

「あ、知っていますーえっと・・・その、篠崎優香さん・・・ですよ  
ね？」

「ええ、でも、どうして……。  
あつ、浩也から話を聞いているのね……。」「

もちろんそれもある。

でも、篠崎優香……彼女はそれ以外にも何かと噂のある人だ。

入学当初は社長さんのご令嬢だつたらしく  
その優げな印象から”深窓の姫君”と男子が騒ぎ立てるぐらいのお嬢様だった。

それが一転、お父さんの会社が倒産して、借金返済のために  
篠崎さんもアルバイトにあけくれる、勤労少女の噂に。  
朝晩、どこかで彼女が働いているのを見たという目撃証言が多数寄せられていた。

その後、風の噂で過労で倒れたという話も聞いたのだけど  
学校に戻ってきた彼女は優げな印象はそのままに、  
美しく艶やかな大人の女性になっていた。

雑誌の読者モデルで登場したこともあり、男子は  
”深窓の姫君”だった頃以上に、彼女が来るたびに騒ぎ立てる。  
男子つて本当にどうしようもないんだから……。

「ふふつ……九条さんの噂も浩也から色々と聞いてるわよ。  
浩也が他人のことを話すなんてホントにめずらしくのに……。」「

篠崎さんが浩也のことを話す時は

大人びた表情が陰を潜め、少女の面影が姿を現す。  
やつぱり、篠崎さんと浩也つて……。

「あの……篠崎さんつて浩也と……その……えつと……。」「

「私と造也の、こと、気になる？」

「え！？ええええ！」

そ、そそそその、わ、わわわわたし・・・。

私は大きさに手をわたわたさせてしまう。

和と洋の關係を言葉にしてゐるにちと羨しいが  
だけど・・・。

「・・・え？ そ、 そ うなんですか？」

「ふふつ・・・安心した？」

あ、安心してしまいましたっ！

「え！ えつと・・・そ、そ、その・・・」

「尊通り、かわいい子ね、九条さんつて。」

ふひい 恥ずかしいよおー！！六があつたら入りたい···。

「私は浩也は……家族っていうのが一番近い表現かな。」

一族・・・ですか?」

「私は浩也が支えてくれなければ生きていけない程に子供なの。  
子供で子供で・・・もう自分が嫌になっちゃうくらいに、ね。

でも、私たちがもつと大人になることができれば……。  
私が巣立てる日もくると思うの。」

篠崎優香さん。家庭の過酷な環境は彼女に様々な苦労を与える  
彼女はその苦労を乗り越えようとしている。

少なくとも私の目には、同世代の男女よりずっと大人にしか映らない。

子供じみた考え方を彼女から感じることはない。  
それでも、そんな彼女すらも浩也は支えてしまうのだという。  
そこに、私の知らない二人の世界があることが、痛いくらい伝わつ  
て……。

「それまで……私たちが大人になれるその日まで  
九条さん、あなたにはつらい日が続くかもしれない。」

「……え？」

「でも、あきらめずに浩也のことを想つていて欲しいの。  
あなたなら……あなたになら浩也の明日を任せられる、そう思  
うから……。」

「し、篠崎さん、それって、どういう……。」

「ふふつ、単なる独り言。

もう、いかなくちゃ。今日は日直なの。

それと、九条さん。私のこと、優香でいいわよ？」

「えつ？」

「名字で呼ばれるの、あまり好きじゃないの。

今度からね、優香って呼んでね。」「

「は、はい。あ、じゃ、じゃあ  
私のことも・・・その、麗奈でいいです!」

「やうね、麗奈、って呼ばせてもらうわ。  
あと、かしいまいなくていいわよ。あなたとは友達でいたいから、  
ね?」

「え、は、はい・・・じゃなくて、その・・・う、うん・・・」「  
こんな感じ?」「

「ふふっ、ううね、合格、かな。それじゃ、私、もう行くから。」

「あ、うん・・・それじゃ、また・・・。」「

「ええ、またね、麗奈。」「

篠崎・・・優香に初めて麗奈、って呼ばれて  
女の私でも、ちょっとドキッとしてしまった。  
やっぱり、優香、綺麗だなあ・・・。

## 転移4日前 麻生真一

朝練は体力づくりが中心になる。  
筋トレ、ストレッチを淡々とこなすこともあれば  
ちょっとした遊び感覚でやつたりもする。

今日は腕立て10回終わるまでの時間を競い合つた。  
いつも審判をしてくれる栗原は珍しく今日は朝練にこれないとメー  
ルがあった。

仕方ないので一年の女子に審判を頼み  
九条と俺で腕立て勝負を始めた。

女相手に筋トレの勝負とか、と思うかもしれないが  
あいつの腕立ての早さは半端ない。  
とてつもない瞬発力を持っている。常人とは思えない。  
故に、俺は全力をだす。ああ、性別なんて関係ない。  
俺は勝つといつたら勝つ！

・・・・・

・・・

・・・

「九条先輩のかち！」

無情にも響く後輩の勝者宣言。

「いえーいーうししそう。

まだまだよのう、真一君。」

「ば、馬鹿な・・・。」

俺が10回目に入ろうかといつも  
もう九条は10回目を終えてしまっていた。

「じゃー私はいつものイチゴオレ。  
よろしくね、真一君。」

敗者は学校の自販機でジュースを一本おくるはめになる。  
とほほ・・・九条とやるようになつてから  
連戦連敗中のオレは、このままいくとイチゴオレ破産してしまひ。

しぶしぶと、イチゴオレを買いに学校の裏手にある自販機まで  
足を運ぶことになった。

あいつを見かけたのはそんな経緯でイチゴオレを買つた、その帰り  
道だった。

学校の裏手にある自販機からやや離れた所に小高い丘があり  
そこには巨大な檍の木がある。

でかくて、生徒の遊び場にはよさそだが

ちょっと前に変質者がここで遊んでいた生徒を怪我させたらしく、  
申し訳程度に、立ち入り禁止の立て札がたつている。

まあ未だにその時の血が残つているとか

そんな冗談に聞こえない話もあり、教師も生徒もよりつかない所だ。

そんな所へ歩いていく女性徒をみかけた。

あいつがこの時間にこの辺にいるなんて珍しいな。

そう思つた俺は、特に何か思つたわけでもなく、自然と声をかけて

しました。

「よひ、篠崎。」

「……あら、えつと……麻生君……だけ?」

「そ、霧島と同じクラスのな。」

何度か霧島と同じいる時に会つてはいるので  
お互い顔見知りには違いないんだけど  
霧島を通じてしか接点がなかったので、まあこうして一人で話すの  
とか  
今まで一回もなかつたな。

「こんな朝早くに学校きてるのも珍しいな。」

「今日は日直だつたんだけど、もう当番の仕事終わつて暇だつたか  
ら。」

「暇だつたつても、この辺の噂、聞いてるだろ?」

「応立ち入り禁止だし、犯人もまだつかまつていらないらしいから  
な。」

「こには割と危ないつて噂だぜ?」

「そういえば、そだつたわね。」

「まあいいじやない、どこにいたつて同じことだもの。」

この学校での篠崎のイメージは優秀な才女様つて奴だ。

学力テストでも度々学年で一位になつてる。

最近は妙にあか抜けてきて、化粧もするよつになつてるもんだから

色々と変な噂も聞くようになつてきただが、  
その辺はやつかみもあつて真偽はよくわからない。

「篠崎つてこんな所で一人でうるうりする奴なのか。  
あんまりそういうイメージじゃなかつたわ。」

どちらかといつと、暇だつたら教室の隅や図書館で  
静かに文学書を読むような、といえばわかつてもらえるだらうか。

「麻生君つて浩也と仲が良いくの?」

「ああ～どうだらうなあ・・・。

ほり、霧島つてあまり人と深く付き合つ奴じやないからな・・・。

まあ、九条の次くらいには仲良いはと想つぜ。」

霧島と一番つるんでいる男子は、間違いなく俺だとは思つが  
仲が良いといつ感じじやないな。  
相手にされていないとも言つ。残念ながらな。

「九条・・・。」

篠崎にとつては九条も俺と同じく、  
霧島を接点にした関係でしかないと想つた俺は  
慌てて説明をつけたしたのだが。

「九条麗奈。俺や霧島と同じクラスの奴。  
剣道部で、表彰とか何度もされてるから、顔ぐらい知つてるんじ  
やないか?」

「ええ、麗奈のことはよく知つてゐるわ。」

「うう、麗奈と浩也も仲がいいわよね。」

「ああいつも俺も、霧島とは同じ中学だったしな。  
それにしても、篠崎は霧島とは中学別だったのに、仲良いよな。  
一年の頃から仲良かったし、どこで知り合ったんだ？」

「ふふっ・・・。昔ちょっとね・・・。」「

そういう篠崎は大切な物を見るような目をする。  
普段はすましていて、周りが騒ぎ立てるのも  
そつぱり理解できなかつたが、こうこう顔もするんだなあと思つた。

「ふうん・・・。幼なじみか何かか？」

「そうね・・・。やういった感じかしら。」

「そつか・・・。

・・・・んじや、俺は先に戻るぜ？」

「うう、ええ。私はもう少しここにいるわ。」「  
そういえばイチゴオレを待つている奴がいると思った俺は  
とつとと戻ることにした。あんまり遅れるとあいつの機嫌が大変な  
ことになる。

「ええ。私はもう少しここにいるわ。」

「授業に遅れるなよ？」

「うう、チャイム聞こえにくいから、予鈴聞こえないかもしね

ぞ？」

「ふふつ・・・ありがとう、麻生君。

あなたって案外、優しい所もあるのね。」

「まあ、ぐく一般的な紳士の嗜み程度にはな。

それじゃ、またな。」

「ええ。」

そういうつて俺は剣道場へと戻つていった。

途中で振り返つて様子をみてみたが、篠崎は特に何をするわけでもなく

木によりかかり、どこか遠くを見ていた。

イチゴオレはすっかりぬるくなつていて、俺は九条のぐちを授業開始まで延々と聞かされることになつたのだが。

授業開始の5分前に、ようやく教室にかけこむことができた。

教室ではほとんどみんな席についていて

扉を開けると、みんなの目線がこちらに集まるのが少し恥ずかしかった。

こんなギリギリにくるのなんて、初めてだつたから

その視線が何か落ち着かず、見知った人の声を聞くとほつとした。

「律子、今日は遅かったねえ。寝坊でもしちやつたとか?」

「あ、そういうわけじゃないんだけど……。」

「そらそつだな。九条じゃあるまいし……。」

あ、真一君。今日は朝練で一緒にいれなかつたからちょっと残念。後で朝練で何やつたのか聞いておかなきや……。

「う、うるさいよ、真一君!」

でも、律子つて朝練に遅れたことなんて一度もなかつたから何かあつたのかなつて……。」

「うん……実はちょっと弟が熱だしちやつてね。それでちょっとタバタしてたの。」

「え! まさ君、大丈夫なの?」

「あ、うん……单なる風邪だつて。」

大丈夫……つてわけじゃないけどそんな大袈裟な病気じゃない

「そつか・・・早くよくなるといいね・・・。」

「うん、ありがとうございます、麗奈ちゃん。」

弟の正志はまだ小学生だったので一人にするのは心配だったんだけどお父さんがお仕事休んでみてくれる、というので私は学校にいくことになった。

三時間目の授業が終わる頃に連絡があり、で  
熱もだいぶひいたときいて、一安心つていった所。

「ぐはっ…まいせへ毎休みだーーー.」

ふふつ、真一君お疲れさま。

そして、そしてお昼休みになつたんだけど、もうなんていうか、見てるこつちがハラハラしてしまつ。

あ、ひ、浩也！

わ、  
私ね  
・  
・  
・  
き、  
昨日ね  
・  
・  
・  
。

麗奈ちゃんがお弁当箱を2つもつて霧島君に話しかけている。でも、篠崎さんはとなりのクラスだし、早く言わないと……。

「お前が、お弁当つくれて来たの。一緒に食べましょ。」

隣のクラスから篠崎さんが現れてしまうよ！

と思つた時には彼女はもう目の前にいた。  
やつぱつこじやなるのかあ・・・。

「わかった、じゃあ、俺は行くぞ九条。」

「あ、う、うん……そうだね……。」

「行きましょ、浩也。」

あ、そうだ……麗奈も一緒に食べない?」

「え? ?」

驚く麗奈ちゃん。でもそれ以上に  
その後ろにいた私と真一君はお互い口をあんぐりさせて  
見つめ合ってしまった。

「せっかくお友達になつたんだし、ね?ダメかしら?」

「え、い、いえ! ゼ、全然ダメじゃないです。  
……じゃなくてだ、ダメじゃないよ。」

「わ、わ、よかつた。浩也もかまわないわよね?」

「あ、ああ。俺は別に問題ないけどな。」

「それじゃあ行きましょ。」

「あ、う、うん。あ、律子、真一君。」

「私、今日は優香と一緒に食べてくるね。」

ゆ、優香・・・。

ちよつと前までは篠崎さん、だつたばづなのに。  
れ、麗奈ちゃん、い、い、一体何をやらかしたの・・・?

「あの・・・一人とも、聞いてる?」

「う、うん、き、聞いてるよ。れ、麗奈ちゃん、ファイトだよー。」

「そ、そりだな、が、がんばれよ。ふあ、ファイトだよ、だ、九条。」

「

私も真一君もちよつとおかしな励ましになつてしまつた。

「もう、一人とも意味不明だよお~。」

えつと・・・それじゃ私もう行くから・・・。待たせてごめん、  
優香、浩也。」

「かまわないわ。それじゃあ行きましょ~。」

そういうて三人は教室からでていつてしまつた。  
えつと・・・これ、なんていう状態?

あの二人の間に麗奈ちゃんが何で割り込めちゃうの・・・?

「な、なあ・・・栗原・・・。」

「な、なに? 麻生君・・・。」

「あいつつて篠崎とあんなに仲よかつたつけ?」

「わ、私の知る限り話をしたこともないはずだけど・・・。」

「あ、せつか……。」

そこからしづらへまひーとしてしまい  
私は今日、お弁当を作り忘れていたことを思って出しちゃった。

「あ、今日お弁当つけてないんだった……。  
食堂行かなきゃ。」

「んー？ 栗原、食堂なの？」

「うん、麻生君はどこで食べるの？」

「うーん、俺も食堂のつもりだったんだけど  
あの謎の光景にびっくりして、かなり出遅れたからなあ……。  
もう席があいてないかもしれないな。」

「そんなにす、いの？」

「まあ行つてみるか。」

そんなこんなで真一君と一人で食堂にいくことになった。  
まさかの、一人っきりでのお食事と思つたんだけど……。

「うわあ……一杯だね……。」

「うーん……の様子だと空いてる席なんてないな……。」

「うれじや、飯食べるといなこね……。」

真一君とのお皿が・・・。

「まあ、いつの時は他をあたるわ。」

「他? 他って? へ? 食堂ついて? こないんでしょう?」

「学校の食堂は、な。

あの堀を越えた先に行きつけの食堂があるんだよ。」

そうこうで真一君は学校の外を指出していった。

「え? あ、あの堀って? 」

あれを超えたら学校の外にでちゃうよ?」

「大丈夫だつて。そんなに遠くないし? 」

「だつて? だつて? 勝手に学校抜け出したらいけないんだよ! ？」

「栗原は眞面目だなあ? 」

俺達は学校を抜けだすんじゃないの。昼飯を食べにいくだけだぜ?」

?」

「それはそうなんだけ? 」

「ほり、早くこいつが。」

「へ? へ? こいつ近いつていつてもやつのんびりはできないぜ?」

「あ、あ、あ、麻生君、まつよー。」

そういうつて走り出す真一君を追つて、問題の堀まで来てしました。

「ほり、いじを乗り越えりやすぐだ。」

「え? いじを超えるの・・・? 」

だ、だめ・・・わ、私には無理だよ・・・。」

「何言つてゐんだよ、たいしたことないつてー  
俺がひつぱつてやるから。」

そういうつて、真一君は堀の上にかるく飛び乗り、  
その上から手をさしのべてくれる。

「ああ、つかまつて。」

私はその手をとつ、いじの高い堀を登つてしまつ。  
今まで学校をさぼつたことのない、真面目で通してきた私にとつて  
昼休みとはいえ、学校の外に抜け出すなんて、とんでもない大冒険  
なのだ。

私が登り切ると、真一君は軽々と堀から学校の外側へと飛び降りた。  
そして、優しく声をかけてくれる。

「ほら、飛び降りてみな。

大丈夫、何かあつても俺が受け止めてやるから。」

私は彼の手をつないで壁を登つた時ですら  
体の火照りを押さえるのに必死だつた。

なのに、こんな時にそんな笑顔でそんなこと言われたら・・・。

普段の私なら怖がって、とても飛び降りるなんてできなかつただろ  
う。

でも、その時は自然と真一君の元へと飛び降りる事ができた。

「おひと。

な、簡単だら?」

そういうて、飛び降りた私を受け止めて真一君が笑顔で私に語りか  
ける。

ああ、また恋こに落ちてしまつた。

真一君に恋こに落ちてしまつのは何度田だら?

恋とこのはせびりも深みがあるのだら?。どんどん、落ちてこく。

ちなみに、このとせ、お姫様だつてで受け止めてもらつたー!

もつ、一生分の幸せをつかつてると、これ!

デキデキもおやめりなこまま、そこからすぐ田の前にあつた  
定食屋さんのような所にほいつた。

「おや、真ちやんじやなこかい。こりつしゃこ、今日お向こする~。

お店の中には人の良さがわなおばかやんがいた。

「俺は・・・そうだな、カレーチャーハンでこよ。

栗原、おまえは何にある?」

「え・・・? わ、私は・・・。

えつと、じやあ、麻生君と回じ奴、お願ひします。」

「ば、ばつかーーーのカレーチャーハンは恐ろしく辛いんだぞ?」

初心者には早いつて、絶対！」

「ええ～大丈夫だよお～。私、辛いの別に苦手じゃないよ？」

「ああ・・・俺でさえあの辛さを克服するのに一ヶ月の時間要したというのに・・・。

栗原・・・骨は拾つてやるからな・・・。」

「もう～大袈裟だよ、麻生君～。」

「カレーチャーハン2つだね。  
せつかく真ちゃんの彼女が来てるんだ、腕によりをかけてつくつ  
てあげるよ。」

「か、彼女つて・・・。」

おばちゃんのトンでも発言に私も真一君も顔を真つ赤にしてしまつ。  
照れてくれるつてことは、少しは脈があるつて思つて良いのかな・・・。

「ば、ばか、おばちゃん、違つて！

栗原とはそ、そんなんじゃないつてのー！」

「おや? そつなのかい?  
ははつ、それじゃ今日だけは彼女になつてもらいないよ、真ちゃん。」

「い、いいから早くつづつてくれよ、おばちゃんー。」

「おや、やうだつたね、悪い悪い。」

「つたぐ・・・。」

「一人の掛け合いをみていると、とても店員とそのお客様といった関係には見えない。

「こういうお店だからなのかもしれない。

「一人の関係はまさに家族のそれですら見えた。

「優しそうな人だね。」

「はあ？ あのおばあちゃんが？

栗原「おまえ、感覚がちょっとおかしいぞ？」

「でも、麻生君、とつても楽しそう。」

「よせよせ、おれはだなあ・・・。」

「麻生君のお母さんもあんな感じなの？

何だか母親にからかわれてる男の子って感じしたよ？」

「ん・・・・そう・・・か・・・・。」

「麻生君・・・？」

「てっきり九条から聞いていると思つたんだがな。」

「え？ な、何の話・・・？」

「俺、母親いわけ。

親父が男手一つで俺を育ててくれた。だから、母親ってよくわか

「らしいわけだ。」

「あつ・・・えつと・・・そ、そななんだ・・・。わ、私知らなくて・・・その、『じ、じめんなさい・・・。』」

「別にいいさ。母親つてのはわからないけどたぶん、おばちゃんみたいな存在なんだなあ・・・って思つてるのは本当のことだしな。」

「ん・・・で、でも・・・でも・・・やっぱり『めんなさい・・・。』」

「俺には母親の記憶がない。だから、俺にとってはそれが普通なんだよ。別に母親のいる家庭をつらやましく思つたことはない。俺と親父は一人つきりでも確かな家族だからな。ドラマでよく冷めた関係の家庭とかあるけどもし、現実にああいう家庭があるなら俺はその何倍も幸せなわけよ。」

「麻生君・・・・・。」

「母親がいないうつて聞いて悪いつて思うのは

栗原、おまえにとつて母親の存在が大切なもつてことだよ。」

「そ、そんなこと・・・なこと・・・と思ひナビ・・・・。」

「栗原、おまえの母親のこと、教えてくれよ。おまえの大切な人のこと。」

「母親がいなこと」を不幸と思つたことはないけれどやつぱり興味はあるわけよ。」

「……は、恥ずかしいから誰にも話しかけダメだよ……。」

「おひ、約束、な。」

「う、うん……や、約束だよ……。」

その後、私は私のお母さんについて真一君と一杯話をした。料理が上手で私もお母さんに憧れて料理を始めたこと。お父さんと仲がよくて娘の私が目のやり場に困るへりへり仲良しな恋人同士だつてこと。

私が病気の時にはずっと寝ずに看病してくれたこと……。私の大好きなお母さんのこと、いっぱい、いっぱい真一君に伝えた。母親を知らない真一君が母の存在を取り戻せるように……。母親という言葉が彼にとつて決して悪いイメージを連想させないようだ……。

真一君は一生懸命話を聞いてくれた。

とてもうれしそうに、でも時には悲しそうに……。ずつとずつと……私の言葉に耳を傾けてしてくれた。

この日のお昼ご飯は私にとつてかけがいのない思い出を生み出してくれた。

真一君と心の底のから語り合えた時。そして、ちよつと辛かつた力レーチャーハン。

この日、この時、この瞬間……。私たちは友達の壁を超えたのだと思つ。

その時から、私は心の中だけでなく、彼のことを「真一君」と呼ぶようになった。

俺は正直困惑していた。

九条と優香は正直仲が悪いと思つていた。  
いや、実際に悪かったと思つ。

それがある日学校にきたら、お互に口笛で呼び合つていて  
一直到日まで一緒に食べようとしたのだ。

「しかし、いつの間におまえら知り合になつていたんだ?」

「へ?えつと……そ、それは……。」

「ふふつ、内緒よ、浩也。ね、麗奈?」

「ふん……うん……そ、内緒なんだよ、浩也。」

「ふん……勝手にしろ……。」

なんて言つた女は一人になるだけでこうも違つものかと思つ。  
優香も一人の時はおとなしいのに、一人になつた途端よく話すようになつた。

「あ、浩也すねてる~!」

「ふふつ、初めてみたよ、浩也のすねてるといー!」

「ホント?かわいいでしょ~。」

浩也つたら、すねるとこつも「うな」。

「へえ～、浩也っぽい、見かけによりか、子供っぽいことがあるんだあ～。」「

「へ～、おまえら一人そろうと圧倒的に俺が不利な気がする・・・。

「

「ふふっ・・・たまにはこうこうのもこいでしょ？

浩也つたらいつも余裕だもの。たまにはドヤドヤしてもらひわなう」と、ね。「

「ふん・・・勝手にしや。」

九条麗奈・・・。不思議な奴だ、あの優香があれ程心を許すとは・・・。

奴は俺や優香にはない、何かをもつているのか？

例えばあの深い闇に光を当てる、心の救いとなるべき何かを・・・。

「また浩也すねてるよお～！何だか今日の浩也はかわいいよお～。

・・・考えすぎだな、単なる天然だらう。

「ふふっ・・・でも、今日は風が気持ちいいわね・・・。

いつもこの日は外で食事をするのがとっても楽しく感じられるわ。

「二人とも、いつもここ飯食べてるの？」

「せうね・・・二人の時は大抵ここ来て時を過ぎすわね・・・。

「ここは学校のはずれにある、大きな樺の木。

最近、ここに遊んでいた生徒が血まみれで発見されている。巷では変質者がやつた、なんてことになつていて、アレはそんな生やさしいものじゃない。

ああいつた傷をつけるなら、日本刀とかそういうたぐいの武器が必要になる。

他にもライオンとかそういう大きさの肉食獣であるとか、だ。

傷のたぐいが全然違う。第一発見者の俺が言つんだから間違いない。

「ここ」の噂はどれもくだらないものだけど、たつた一つ、良い噂もあるわ。

あの大木には大地の精靈が住んでいて、どんな願いでも一つだけかなえてくれるの。

「どんな願いでも叶うの? 夢みたいな話だねえ。」

「どんな願いでも叶う代わりに、その身を生け贋として差し出す必要があるんだって。

ここに見つかった人は、そつやつて自分の身を生け贋に捧げた人らしいわよ。」

「ひつ・・・。なんだか急に夢がなくなつちやつたよ。」

「ふふっ、何かを護るために何かを犠牲にしないといけない。

そういう所があつて、この噂なら信じてもいいかなつて思つてる

わ。」

「で、でも・・・そんなの悲しいよ・・・。

私はそういうのはやだな・・・。」

俺はあの現場を見て以来、再びこの場所には近寄らなにように優香

にはいつたが

あいつは頑として言つことをきかなかつた。

本当に、そういうた荒唐無稽の噂を信じているとは思えないがそれに近い何かがあるんぢやないかと思つてゐる。

「……めんなさい。あまり明るい話じやなかつたわね。」

「わ、私は別にかまわないよ……？」

「生け贅なんてばかげているさ。

おまえが何かを望んだとしても、俺が生け贅になんてさせない。

「えつ・・・・・あ、ありがとつ・・・浩也。

ふふつ・・・・・頼りにしてるよ・・・。」

あいつは、ここで何かをかなえてしまつたのかもしれない。  
だからその代価を支払う時を待つてゐるのだとしたら。  
それでも、俺は何とかしてやりたい。そつとくつてゐる。

事件を思い出してすっかり忘れていたが

麗奈と優香の組み合せは思つた以上に強力だつた。

「そんなわけで、浩也からもお願ひしてよ。」

「そうね、浩也。」

麗奈のためにも、一緒にお願ひしてあげたら?」

何の話かといふと。放課後、麻生が例によつて

俺に部活の勧誘をかけてきて、運悪くそこに九条が相乗りしてき  
さらに運悪く、そこに優香が現れてしまつた。

「真一君も、このままだと私に一勝もできないまま卒業しちゃうからね。

涼夏先生の元で少しは鍛えられれば、また違った発見もあるかなつて。」

涼夏先生といつのは、俺と九条が師事している武道の師範で武道全般に通じている化け物のような人だ。柔道、剣道、合気道あわせて十何段になるとかなんとか。

「涼夏先生は弟子を選ぶし、どうだろ?」

「だから、涼夏先生お気に入りの浩也から頼んで欲しいっていってるんじゃない!」

「その見返りに、俺はあの人との稽古に延々とつきあわせられるんだが・・・。」

「あら、浩也! たら。涼夏先生に命の危険を感じさせないで、凶暴なのに、稽古につきあうのが怖いって言つの?」

事情をしる優香と勢いのある麗奈によつて、俺はタジタジになつていた。

ちなみに、涼夏曰く、命の危険を感じるようなドキドキした真剣勝負ができる人は少なく俺はその数少ない一人だというのだ。

とはいっても、俺が勝てたことはただの一度もない。むしろ、ボロボロに負ける。

それで、何故命の危険を感じるんだ・・・?

「霧島つ！俺からも頼む！俺を・・・俺を男にしてくれつ！」

「麻生のよくわからない熱血スイッチが入つてしまつた。俺は断り切れず、しぶしぶ了承し、涼夏先生の道場まで案内するこ<sup>ト</sup>になつた。

「で、この子が新しい門下生？」

「そうです、麻生真一君つて言つて、私と同級生なんです。」

「努力は足りませんが、そこそこ才能はある奴です。涼夏師範に鍛えてもらえれば、と思いまして。」

「お、おい、霧島・・・。」

「なんだ、麻生？」

「」の人がさつさつ言つてた涼夏師範なのか？

「そつだ、九条がさつさつ言つてこつただろ？」

「何か、九条よりさらに華奢じやないか？」

「武道の達人つていうから、もつとごつい人かと・・・。」

「麻生君・・・だつけ？私が師範じや不安かしら？」

やばい、涼夏先生の眼がマジになつていて。麻生、恨むな『』の口の軽さを恨むんだ。

「や、そんなことはないんですけど・・・」

思つたより華奢だし、稽古とかしたら何か怪我しちゃうやうで・・・」

「

麻生は思つた以上に馬鹿だつた。

この後、ストレス発散代わりに稽古につきあつ俺の気持ちも考えて欲しい。

「人は見かけによらないものよ、麻生君。何なら少し試してみる?」

「え、でも俺、手加減しませんよ?」

「良い心がけね・・・でも、それは私も同じ。私だつて武道を志すもの。試合を挑むからには相応の覚悟はできています。」

「それまで言つなり、お相手させて頂きます。」

俺も九条も、呆然とその成り行きを見守るしかなかつた。

涼夏師範は確かに小柄で見た目も綺麗な女子つていう感じでまあ、麻生のいうこともわからなくはない。

だが、もう一度いつておく。

涼夏師範は、柔道、剣道、合気道で数十段の腕前をもつ化け物だ。いや、正面きつて化け物といつたら命がないので口にはだすなよ。

麻生は予想通り、打ちのめされ、たたきとばされ、ぼろ雑巾のようにズタボロになつていて。

ただ、思つた以上にタフで何度も起きあがる麻生に対しても涼夏師範の何かが目覚めたらしく、これからもずっと稽古をつけてくれるそうだ。

だが、俺はよかつたな、等とほとても言えなかつた。

九条麗奈。正直私は勝てないと思ってしまった。  
私が10年以上かけて、その思いを全て注いで  
ようやくつなぎ止めている彼との絆。  
それを、彼女はたった3年、同じ中学校にいただけで、  
あつという間に追いついてしまった。

私は彼との絆を決して手放したくない。  
少なくとも、この命の続く限り。

だから、というわけじゃない。彼女にそれなりの興味もあった。  
だけど、もしもその時、彼女の性格なら本当のことを言えば  
身を引いてくれる。そういうた打算がないわけではない。

私はそういう汚れた女だから。

「もう真一君、だらしないよ。」

麗奈と仲良くなつてからの一日は怒濤のようだつた。

彼女の元気はどんどん私を突き動かし、それが浩也にまで及んだ。  
浩也と同じ理由で私も彼女の魅力を十二分に見せつけられた。  
それは友達としてうれしくもあり、恋敵として恐ろしくもあつた。

「も、もうだめ・・・だ・・・。  
き、霧島・・・骨はひろつてくれえ・・・。」

麻生君はへろへろになつている。  
涼夏先生にあんな口をきくなんて、正氣とは思えない。

「あ、私こっちだから。またねー。」

そうこつて栗原さんが帰つていぐ。

彼女の」とはいい。浩也はああい「う子には興味ないから。

「またねー律子。

ほらほら、真一君、こつまでもへろへろしないの~。

あ、涼夏先生の所には毎朝顔をだすこと。朝練より優先ね。」

「あ、朝から、あんな日にあうのか・・・。

な、なんだかこれつて命の危険を感じてきたぞ・・・?」

「命の危険を感じるぐらこの真剣勝負が涼夏先生のモットーだからな。

喜べ、麻生。おまえは見込みがあるつことだ。」

「あ、じゅあ私と浩也はこっちだから。

「ごめんね、優香。真一君が倒れたら見捨てていいからね。」

「つておこー見捨てるの進めるなよー。」

「ええ、倒れないようにがんばってね、麻生君」

「へいへい・・・たつぐ、九条も篠崎も仲がよここつて。」

「それじゃーねー。」

そつこつて、浩也と麗奈とわかれ、麻生君と一人になる。

今日の朝に少し話したのと、麗奈の騒ぎの渦に巻き込まれたのもあつて

麻生君とも、それなりに話してもいいとは思つよつたなつた。

「もう涼夏先生の所に行くのは断つたらどう？」

今日のでこりたでしょ？ あの人、厳しいわよ。」

「まー厳しいししんどいのは確かだけどな。

どうしても、強くなりたいんだ。しがみついてでも、ついていく  
さ。」

麻生君はまだ涼夏先生の特訓を受けるようだ。

「男の子つてそこまで強くなりたいものなの？」

「あーまーなんていうか、その・・・。」

「ああ、麗奈に負けるのが、かつてわるい、とか思つてるんだ。」

「ば、馬鹿つー違つつてのー！」

「ふふつ、男つて単純。」

麻生君が麗奈のことを気に入つてるのは知つていた。

彼ががんばってくれれば、私ももう少し氣が楽になるのだけど・・・。

「麗奈は浩也と戦つても勝つてゐる時もあるし、相当強いわよ。  
あの一人と同じレベルになるのは、かなり大変だと思つわよ。」

「まあそれは確かにな。」

あの一人が俺と同じ年なんて未だに信じられないからな。」

「・・・ふふつ、確かにね。

あの一人つてちょっとずるいわよね？

何でもかんでも出来過ぎていて。実は2つぐらい年上かもつていつも思うわ。」

「あれ、篠崎もさう思う？」

「浩也とは子供の頃からのつき合いだけど、友達は浩也しかいなかつたのね。

だから、私にとっての普通は浩也だったんだけど、彼がその・・・。

あまりにも出来過ぎるから、私、自分が駄目な子だつてずつと思っていたの。」

懐かしい昔。私が10回聞いても覚えられないものを、彼は一度で覚えてしまつ。

私が何時間も考えてもわからない問題を彼は見た瞬間に解いてしまう。

「篠崎つて頭良いつてイメージあつたんだけどなあ・・・。」

「だつて、いっぱい勉強したもの。浩也に追いつこうと、普通にならうと思つてね。

何度も本を読んで覚えたし、分からぬ問題も、何度も何度も考えて解けるようになつていつた。

そして気が付いたら才女なんて呼ばれていて、

でも私はまだ自分のことを駄目な子だつて思つていて。

浩也が天才で、私が普通なんだつて気がつくまでに10年ぐらいかかつたと思うわ。」

「10年つて・・・おまえも結構ドジなのな。」

體はせうと昇へ氣りくだら・・・・・

「う、うぬれこわね・・・そ、せうこつ麻生君はどうなのよ? 麗奈との話、聞かせなさい。」

「う、あ、俺か？な、何か恥ずかしいな、昔の話なんて・・・。」

「あら、私にだけ話をねじておいて、自分の話になると尻込みする  
氣？」

「う、うぬせーにな・・・わかったよーは、話せばいいんだろー。」

「そうそう、話してくれればいいのよ。」

麻生君の、というより麗奈の過去には興味がある。

「じゃあ、最初に麗奈と知り合ったのはいつ?」

最初はアレたな

「アレ？」

「俺と九条は同じ中学だつたんだけどクラスとかはずつと別だつたんだよ。」

ただ、中学一年ぐらいたちよつとした事件があつてな・・・。」「

「事件？それがきっかけなの？」

「俺つてそれまで結構ガラ悪かったのよ。

ケンカで負けたことなんてなかつたし三年相手でも楽勝だつたな。

」

「大抵の奴は俺の名前聞くだけでぶるちゃつて

二年になるとまともにかかつてくる奴もいなくてな。で、学校では結構やりたい放題だつたのよ。教師もびびつて何もいつてこないし。」

「いるわよねえ・・・そういう人つて。

でも、今からは想像できないわね・・・。随分大人しくなつてゐ

わよ？」

「まあ、あの事件があつたからな。」

「いよいよ、本編の始まりね。」

その話は私と麻生君の関係を今までとは違つたものにした。決して届かない、天との壁を何とか越えようとあがくもの。私たちは同じ高みを目指していくのだった。

俺は篠崎に九条との出会いを話すことになった。  
始まりはそう、あの事件だ。

「教師でハゲ田って嫌な教師がいてな。  
俺のような奴にはヘコヘコしてんだけど普通の奴には態度でかい  
んだよ、そいつ。」

「はげた……？」

「あだ名なんだけど……あれ、本名なんだつけ?  
みんなハゲ田って呼ぶから本名忘れたな……。  
まあ、そのハゲ田なんだけどそいつが栗原にネチネチからんでだ  
わけよ。」

「栗原って、同じクラスの栗原さん?」

「そつ、俺はその頃は知り合いでじやなかつたんだけどな。  
栗原は生徒会やつてたんで、顔を知つてるぐらいだつたな。  
で、ハゲ田が担任のクラスを通りかかるとあいつの嫌な声が聞こ  
えてきてな……。」

その様子を再現するごだ。

（）

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「栗原あ・・・おまえ、今回のトストは随分と点数が上がってるじゃないか・・・。」

「そ、そりですか・・・。」

「アリですかじゃないだろー。あやしい・・・あやしこーかー。」

「な、何がですか・・・?」

「おまえ、カணニングとか、してないよなー。  
先生、信じてるけど、でもこんなに点数上がるとやっぱりおかしいよなあ・・・。」

「し、してません、カণニングなんて!」

「アリかあーでも、おまえテストの田、俺のチエック受けないだろおー。」

チエック受けなこつて」とはやつぱりやましい事があつたんじやないのかあー?」

（――）

「麻生君、ちよつといめん。チエック・・・?チエックって何?」

「ボディーチエック。単なるセクハラだよ。  
気の弱い子狙つてやつてるわけ、ハゲ田。」

（――）

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「だ、だつて、あんなの・・・。」

「あやしい・・・あやしいぞお～栗原あ～い、今からでもチョック受けとみるかあ～？」

「や、やめてください・・・。」

「うへへつ、大丈夫だぞお～栗原～。チェック受けければ親には内緒にするからなあ・・・。」

~~~~~

「ちよつと、何なの、それはげ。」

「まあ、そういう奴だつたんだよ。」

「後から聞いたんだけど点数上がつたつてもたつた10点ぐらいだつたんだぜ？」

「ハゲ田には理由なんて何でもよかつたんだよ。要は”チョック”したかつただけみたいだな。で、偶然にも俺はこの場を通りかかったわけだ。」

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「おい、ハゲ。随分と楽しそうじゃないか、えええ？」

「あ、あ、麻生！な、な、なんで！」・・・。

お、おまえのクラスは「じょやないぞー！」

「うーん、何かハゲ臭いからよおー。氣になつて授業に集中できな  
いんですよー。」

「ぐ、ぐえつー！」

「あれ？まだハゲ臭いなあ・・・。もう一発いっとか・・・。」

「ぎやびんー！」

「「」のハゲ臭さは異常だなあ・・・。  
「」なつたら完全脱臭しないとなあ・・・。」

「びぱつー！  
ひぎやぴつー！  
し、しへやー！  
ぎやむばー！」

「あ、あの・・・わ、私なら大丈夫ですから・・・。  
だ、だから・・・。」

「生徒力イチヨーは優しいねえ・・・。  
でも、「」のうのは許しちゃダメだぜ？」

「どつゅー！」

「で、でも、これ以上やつたら先生死んじゃいますー。」

「どつっぽー！」

「いいの、いいの。先生なんてここにはいないから。ここにいるのはハゲ臭い、ただのハゲ虫だから。」

「にせんだもつ！」

「あ、麻生君、この前も問題起こしたばつかでしょ？」

こ、これ以上何かやつたらダメだつて言われてたじやない?」

「はっ？ 何でおまえがそんなの知ってるの？」

「あ、あの・・・先生方から生徒会にも連絡があつて・・・。その、それで・・・。」

「じ、じびやつ！」

「うりぬなつ！」

「だ、ダメです、あ、麻生君！」

「びべつ！

「すむるん！」

「...ハタチハタチハタチ」

「じゅばなつー！」

}{ } } } }

「ねえ、麻生君。ハゲ田の悲鳴はもういいんだけど麗奈はいつでし  
ぐるの？」

「ひょっとして、話が脱線してない？」

「ば、ばっか、これからでてくる所だつてのー。  
ちや、ちゃんと最後まで聞けよーーー。」

「あら、じめんなさいーーー。」

「だつて、はげ田の悲鳴がやりたかっただけなのかなつて思つちや  
つてーーー。」

＼＼＼＼＼

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「もしもしー、きみ。」

「どうどうどうりんーーー。  
どなどなどりんーーー。」

「ひひ、少年。」

「ひもなつひーーー。」

「・・・あ？

「誰が少年だ・・・？」

「きみだよ、少年。」

「おい、俺を少年なんて呼ぶなっつーの。  
つか、おまえ誰だよ?」

「子供の頃からおやじの名前で呼んでいたんだよ。」

「おい、人の話聞けよ。おまえ、誰だつての?」

「子供が何をやめたか教えてあげなさい。」

「ハゲの臭い取りは終わりだ。次は生意気な女の教育だな・・・。」

またまた、ナリの生意氣には負けるよ。

「うれしいねえ、久しぶりに俺とケンカしてくれる奴が現れたよ。後から私、女の子だから許して、なんて言つてくれるなよ？」

「あれ、今度は私を殴るんだ？」  
やつぱり子供だね、キミつて。実力の違いもわからないんだもん。

L

「『託はいいから、死ね。』

「はっすれー。ダメダメ、そんなんじゃ一生私には勝てないよ。」

「ぬ、ぬかせ!」

「はあ～眠くて、あぐびがでそりだよ…………」

תְּהִלָּה - ג

「ふわあゝああ・・・ねむう・・・。」

「殺す！」

「ふんふんと、何かハエがいるみたいだよお。」

「ちゅ、ちゅ」とかといふ。

ああかー！」

「あ、しまった・・・手加減してないや・・・。  
ま、丈夫そうだし、いつか・・・。」

「ぐ  
が  
・  
・  
・  
・  
」

~~~~~

「ねえ、まさか、一撃でやられたの？」

「う、うるさいな・・・油断してたのもあるんだよ・・・。  
まあ、とこかく気づいたら保健室でな。」

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「ぐつ・・・ビ、ビ」だ・・・」  
「へ・

「あ、気がついたんだね、麻生君？」

「あ、ああ？ せ、生徒かいちょー？  
あれ・・・？」

「やつ、少年。」

「お、おまえつ・・・あ、いつつ・・・。」

「あ、ま、まだ無理しちゃダメだよ・・・。」

「田が覚めたかな、ボク？」

「」、「」、「」、「」、「」

「未熟、未熟。あの程度で糀がつてるなんてかわいいね、少年？」

「くつ・・・お、おまえ何者なんだよ？  
俺を簡単にあしらいやがつて・・・。」

「キミが弱すぎるだけだよ。」

「へ、ひむといー！ それより、おまえ名前教えての。」

「ひりこ、立場が弱い君の方から先に名乗りなさい。  
力関係はもう成立してるんだからね。」

「へへ、あ、麻生だ。一年の麻生真一。名前くらい知ってるだろ？

が  
？  
」

「くわ、この・・・真一だよ。麻生真一。」

「そつか……じやあ真一君って呼んであげるよ、少年。」

馴れ馴れしい二つの！」

「キミがもう少し大人になつたら麻生君つて呼んであげる。キミだつて子供の時は真一君つて呼ばれてたんでしょ?」

一呼はれてない二ての！」

あ、それじゃ真ちゃんかな?「

「おお、いいやつだ！ それで、おお、いいやつだ！」

おもて者をもては力氣麗奈

卷之六

は？だから、九条麗奈たって教えたでしょ？」

「そりゃなくてたなあ…・・・何でおまえあんなに強しわけ?」

私が強いんじゃなくて、キミが弱いの、真一君。

「馬鹿言うなっての、俺は強いんだよ。今までケンカで負けたこと

なんてないんだぜ？」

「ケンカねえ・・・素人相手にいい気になつてるだけでしょ？  
武道の世界には真一君より強い人なんていくらでもいるよ。」

「はつ？なんだよ、その武道の世界つて・・・。」

「武道で全国や世界で活躍する人とか、相当強いよ。  
真一君なんて、ホント相手にならないんじやないかなー。」

「空手部の奴なら何人も倒したつての。  
武道なんて、あんなの形ばつかだろ？」

「だから全国レベルの人だつてば。そういう人はちゃんと実力も備  
えてるの。  
何なら、うちの剣道場来てみる？高校生とかだけど全国レベルの  
人も何人かきてるし。」

「はつ？うちのつて、おまえの家、道場なの？」

「まあね、お父さんが師範やつてるの。真一君さえよければ、鍛え  
直してあげるよ。」

「んだよ、随分と世話やくな、おい。」

「まあ、やりすぎではあつたけどハゲ男から  
律子を守つてくれたみたいだし。そのお礼かな。  
それに、真一君も私に負けつ放しじや悔しいんじやない？  
真一君が真面目に道場通つて鍛え上げてから、  
もう一度だけ再戦してあげてもいいかな、つて。」

「「」のひ・・・良い度胸じゃないか？」

俺がその道場に通つて鍛錬とかしたら絶対におまえには負けないぜ？」

「それはどうかなあ・・・真一君つて弱そうだし。」

「くつ・・・絶対勝つてやるーおまえには絶対勝つてやるー。」

「うんうん、若い内はそのぐらに元氣があつた方がいいよ。」

「同じ年だつてのー。」

（――――）

「あなたつて単純なのね・・・。」

「言つた・・・まあ、俺なりに結構ショックだつたんだよ。」

同じ年の女子に手も足もでないなんて今までの俺からは考えられないなつたからな。」

「これがきつかけで真面目になつたつて言つか・・・。」

「まあ、真面目になつたつて言つか・・・。」

俺が一撃でのされたつて話はあつという間に近辺に広まつてな。すると、どいつもこいつも途端に態度でかくなつちまつてな。

昨日まで俺の顔見るだけでぶるつてた奴らが急にでかい顔して俺の前を通りていくんだけ？

何か、俺的にはどうでもよくなつてな。

それに、練習に忙しくてそんな暇がなかつたつてのもあるけどな。

九条とはそれからの腐れ縁だな。」

「で、今もまだ麗奈にはかなわないわけだ？」

「い、言つな・・・あいつ、本当に強いんだよ・・・。  
つたく、霧島といい本当に同じ年なのか？あいつら・・・。」

「ふふつ、そうか、才能ある人つて本当にずるいよね。  
お互ひ、がんばりましよう。彼らの才能に負けないよう、必死に  
努力してしがみついて・・・。」

「まあ篠崎は俺より見込みありそただけどなー。  
おまえもめげるなよ。」

「ふふつ、ありがと。」

九条と出会つてから俺がずっと味わい続けてきた劣等感。  
平凡たる自分の才能を呪い、天との才を持つ者に憧れ血のにじむ努  
力を続ける日々。

篠崎も霧島を前にその思いをしてきたのだといつ。

俺達は案外似たもの同士あつたのかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4823ba/>

---

私の転移物語

2012年1月14日22時55分発行